



ちいさなえんそく

お膳の上のお弁当ひとつ

かよはふうっとほっぺたをふくらませると

「お兄ちゃんだけいいな。かよも遠足行きたいな」

お母さんの割烹着をひっぱりました。

「お兄ちゃんは一年生だからね。かよも桜がさいたら幼稚園でしょ。遠足行けるわよ」

お母さんは朝ごはんのみそ汁をまぜながら言いました。

お父さんが出かけ お兄ちゃんもリュックをせおって飛び出していくと かよのほっぺはもっとふくらんできました。

「かよにもお弁当つくってあげましょうね。

ひろみつ君と八幡様へ遠足に行ってらっしゃい。」

お母さんが笑いながら言うのを聞くと かよはとびはねました。

「いってきま〜す！」

リュックにはお弁当、それにとっておきのキャラメルまで入っています。おとなりのひろみつ君はいつもの虫採りあみも持っています。手をつないで歩いて行くと きんもくせいのかおりが鼻をくすぐりました。

神戸の海も山も見える八幡さま。表の鳥居から続く石だたみは市電の停留所から帰る時の近道でお母さんとよく通ります。でも今日はなぜかきらきらしています。お社の裏は見上げるような樹がたくさんあります。お日さまの光りがさわさわとそそいでいます。

ひろみつ君とかよは一番大きな樹の根元にすわりました。すぐにお弁当を開けます。かよのは小さなおにぎりと玉子焼き、お肉の炊いたの。ひろみつ君のはのりまきです。ごっくんのどがなりました。

白いふわふわした着物と青いはかまをつけた宮司さんががんじきで落ち葉をはきながら「おやおや お弁当かい？まだお昼にはずいぶん時間があるけどね。」と笑ってこちらを見ました。

かよははずかしくてはずかしくてうつむいてしまいました。ひろみつ君は大きな目玉をくるっとさせて元気いっぱいです。

「今日のかよちゃんと遠足やねん。一年生みたいやろ。幼稚園も一緒にいくねんで」

「そりゃあええなあ。まあなかよくおあがり」

腰をたたきながら宮司さんは社務所へ入ってしまいました。

おにぎりをぱくっと食べました。ひろみつ君ののりまきとかえっこもしました。

ざ〜と風が吹いてきて葉がみんな歌っているようです。小鳥も声を合わせます。かよも小さな声で「どんぐりころころ」と歌いました。ひろみつ君は

「いっぱいトンボ採ってくるな」

あみをふりまわしながら走って行ってしまいました。

ひろみつ君が林の向こうに見えなくなると 辺りが急にしーんとして葉も歌うのをやめ ざわざわ騒ぎ出しました。お日さまを雲が隠して寒くなりました。かよは大きな声で「どんぐりころころ」と歌ってみましたが、どきどきが止まりません。

「おうちへ帰りたいなあ」

涙が一粒落ちかけた時 ひろみつ君が

「ぜんぜんつかまえられへん」

とあみを肩にかけてもどってきました。

「あれっどないしたん」

ひろみつ君に顔をのぞかれると かよはあわてリュックからキャラメルを出してひとつづあげると 小さな声で言いました。

「もう帰りたい」

「今来たところなのに。今度は向こうの草のところでコオロギ採るんや。」

キャラメルを口に入れたひろみつ君はぶすっとしました。

「もう帰りたい！帰る！」

泣きながら言うかよをあきれたように見ていたひろみつ君は

「弱虫よわむし なきむしか～よ！」

大きな声で言うともた走って行ってしまいました。もたれていた巨人のような樹がわ～っと枝の腕を伸ばしてかよを捕まえようとしてきました。枝にとまったカラスがギャーギャーこちらをにらみました。

「帰りたいよ～」

かよの涙でにじんだ目に白いものとどんぐりが映りました。びっくりして顔を上げるとひろみつ君の虫取りあみに入ったたくさんのだんごりでした。

「帰ろ。」

さっさとリュックを背負って歩きかけたひろみつ君の手にキャラメルを箱ごと乗せました。

こまとペンダントにしてもらったどんぐりはそれからずーとかよの宝物になりました。

エピローグ

神戸に大きな地震があった年の秋、佳世は五十年ぶりに生まれた町の駅におりました。懐かしくて住んでいた所へも足を向けました。一帯が取り壊されてほとんど更地になっていました。一軒だけ新しい立派な二階建ての家が建っています。まだ塀もできていないその家の表札を何気なくのぞくと『東博光』

「あっ ひろみつ君」

一緒に幼稚園に行こうと約束していた真っ黒だったひろみつ君。次の年の二月にかよは遠くの町へ急に引っ越してしまったのです。

思いついて八幡宮の鳥居をくぐった時あんぐりと口を開けてしまいました。大きな森だと思っていた境内のなんと狭いことでしょう。

「ちいさなえんそく」を思い出して佳世はどんぐりを一つそっと拾いました。

おしまい